

序論

みなさん。おはようございます。3月も中旬を迎えました。まだまだ、寒さが身に染みる日が多いですが、すこしずつ春の気配を感じるようになってきたように思います。毎日、同じように見えても少しずつ変わっていく自然の変化に、昔の人は敏感でした。草木が「芽」を出し、「花」を咲かせる様子に春の訪れを感じていました。

教会で、「春」の行事といえば、なんと言ってもイースターです。今年は3月31日(日)です。イースターは、主イエス・キリストの復活を記念するお祝いです。このキリストの復活=死からのよみがえりは、永遠のいのちをいただいた私たちが将来、復活することの先駆けですから、教会では例年、イースターの日曜日に、私たちより先に天に召されていった個人を偲びつつ、主が約束してくださっている「復活」と「永遠のいのち」の希望をあおいで、猪名川霊園にある教会の納骨堂で墓前礼拝のときを持っています。

週報でお知らせしているとおり、今年も3月31日のイースターの午後日に予定しています。猪名川霊園には桜の木がたくさん植わっているので、いつも春の墓前集会のときに私たちの目を楽しませてくれます。昨日確認した予想によると、大阪の今年の開花予想は23日ごろ、満開は31日だそうです。予想通りなら、ちょうどイースターの墓前集会の時が満開になりますので、楽しみです。

物語の背景： 受難週と復活祭(イースター)

「春」繋がりで、イースターに話題が飛んでしまいましたが、イースターの前に、つまり「主イエスの死からの復活」のまえに、「主イエスの十字架の死」があります。教会の長い歴史の中では、イースター前の一週間は「受難週」として特別に扱われてきました。

今年の受難週は、次週3月24日の日曜日から始まります。この日は、「棕櫚の日曜日」とか「棕櫚の主日」といいますが、それは、イエス様がロバの子に乗ってエルサレムの町に入られたとき、人々が棕櫚の葉を、手に持ったり、道に敷き詰めたりして歓迎したことに由来しています。聖書に記されている、イエス様のエルサレム入城は日曜日の出来事でした。

しかし、この大歓迎からわずか一週間のうちに、イエス様は理不尽に拘束され、不当な裁判の末に、十字架にかけられ凄惨な死を迎えることとなりました。たった7日間の中に、すべてが覆えられました。それゆえ、イエス様の生涯の最後の7日間を「受難週」と呼びます。イエス様は金曜日に十字架にかけられて亡くなります。そして、その3日後の日曜日に甦られました。金曜日から3日後と言うと、私たちは土・日・月と数えて月曜日だと考えますが、当時のユダヤの数え方では足掛け3日と数えていました。ですから、3日後というのは、金・土・日となりますので、イエス様が復活されたのは日曜日ということになります。受難週の次の日曜日が、ちょうどイースターの日曜日となります。

弟子たちの心は悲しみでいっぱいになった

さて、今朝、朗読していただいた箇所は、いわゆる「最後の晚餐」のときに、イエス様が弟子たちに語られた言葉です。それは、受難週の木曜日の出来事でした。木曜日の夜の出来事です。イエス様が十字架にかけられて死なれたのは、金曜日ですから、その前日の夜です。もう十字架はすぐそこにまで迫っていました。

4節で、イエス様は、「これらのことをあなたがたに話したのは」と言われています。「これらのこと」とあるとおり、ここでイエス様は幾つかのことををお語りになっています。そして、6節でイエス様が、「わたしがこれらのことを話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。」と言われ

ているように、弟子たちにとって、それはとても悲しくさせる内容でした。

弟子たちはなぜ、そんなに悲しくなったのでしょうか。イエスさまは、彼らに何を言われたのでしょうか。

弟子たちのもとから去って行かれるイエス様

実は、このとき、弟子たちの心が悲しみでいっぱいになったということを伝えているのは、ヨハネの福音書だけで、他のマタイ、マルコ、ルカの3つの福音書は、そこまで詳しく弟子たちの様子を伝えていません。

弟子たちが何故、そんなに心が悲しみに満たされてしまったのでしょうか？それは、ヨハネの福音書で非常に強調されていることと関係しています。ヨハネの福音書では、イエス様は繰り返し繰り返し「もうしばらくすると、弟子たちのもとから去って行かれる」ということを語られました。しかも、「わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません」（ヨハネ 13:33）ということも繰り返して言われました。弟子たちからすれば、「イエス様は、自分たちの知らない遠いところへ、私たちを置いて行ってしまおう」ように思えたことでしょう。それで、弟子たちの心は悲しみでいっぱいになってしまいました。

弟子たちのもとを去って行かれることは、他の福音書でも語られていないわけではありません。そもそもイエス様はこの最後の晩餐よりももっとずっと以前に、ご自分がエルサレムで祭司長や律法学者たちに捕えられて殺され、三日目によみがえると弟子たちに教えていました。そして、この最後の晩餐のときにも、それを思わせる印象的で象徴的なことをなさっています。

すなわち、パンを取ってそれを裂き「とって食べなさい。これはわたしのからだです。と言われ、杯を取って感謝の祈りをささげて「この杯から飲みなさい。これは多くの人のために、罪の許しのために流されるわたしの契約の血です。」と言われて弟子たちに分け与えられました(マタイ 26 章)。今も私たちが守っている聖餐式の原型となった出来事です。からだが裂かれ、血が流されること、これはキリストの十字架の死を象徴するものです。弟子たちの前から、イエス様がいなくなることを連想させます。

しかし、しばらくするとご自分がいなくなるということを、それ以上に明確に示しているのがヨハネの福音書です。ヨハネの福音書では、イエス様はこのことをはっきりと言葉にして語られました。

助け主が与えられる

しかし、イエス様は、弟子たちの心が悲しみでいっぱいになることだけを語られたわけではありません。7 節で主イエスは力強く彼らに語り掛けます。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいではなりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」

イエス様は、自分に代わる助け主を弟子たちに送ると言われました。自分たちを置いて、ついて行くことのできないところへ去って行ってしまおうと言われたイエス様に、弟子たちはまるで見捨てられたかのように感じていたかもしれません。しかし、イエス様は決して弟子たちを見捨てるようなお方ではありません。寝食を共にし、同じ時間を過ごし、喜びと悲しみを分かち合ってきたイエス様がいなくなることは、弟子たちにとっては、確かに悲しいことでした。自分の人生をかけて、いのちをかけてこの人について行こうと思えるほどに信頼していた人が、急にいなくなってしまうことは、とてもつらいことです。

しかし、イエス様は「真実」はこうだと言われました。すなわち、「わたしが去っていくことが、あなたがたの益になる」のだと。あなたがたは今、悲しんでいるけれども、真実はそれがあなたがたの祝福につながるのだと言われます。

イエス様がここで言われている「助け主」とは、聖霊(御霊)のことです。イエス様は、ご自分が弟子た

ちのもとからいなくなるということを繰り返しお語りになりましたが、「助け主」である御霊を遣わしてくださるといことも、同じくらい何度も何度も繰り返し、強調しています。ただ、心が悲しみでいっぱいになっていた弟子たちは、このイエス様の言葉の意味と、そしてそこに示されている主の深い愛を受け止めることができずにいました。12節にも、「あなたがたに話すことはまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐えられません」とあるように、イエス様が「聖霊を送ってくださる」と約束してくださった素晴らしい言葉を、信じることができなかつたのです。

聖霊の働き① キリストを思い起こさせる

聖書を読むと、イエス様が送ってくださると約束してくださった「聖霊」には様々な働きがあります。今日はそのうちの3つのことに心を留めたいと思います。

一つ目は、聖霊はキリストを思い起こさせるということです。4節でイエス様は「これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、私がそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。」と言われていました。「その時」というのは、後に聖霊が与えられる時のことです。聖霊は、イエス様が語られたことを思い起こさせるお方です。思い起こさせるということは、すでに少なくとも一度は語られ、そしてそれを聞いているということです。

私たちに対する神の言葉は、既に語られています。聖書のみことばを通して、神様は私たちに、既にお語りくださっています。その聖書が語っている中心的な内容は、イエス・キリストの十字架です。旧約聖書はイエス様の十字架を指し示し、そして新約聖書は現実となったイエス様の十字架をはっきりと証しています。神のひとり子であるイエス・キリスト＝罪のない一人の正しいお方が、私たちのすべての罪を背負って十字架にかかって死んでくださったという、本来あり得ない恵みによって、私たちには罪ゆるされ、義とされて、神の子どもとされる道が開かれています。それが聖書が語っている神様のみこころです。先週森田先生が、この神様の有り難い(有り得ない)恵みについて語ってくださいました。

キリストは人となった神の御言葉です。それは、(こんな言い方をしているかわかりませんが…)イエス様の生涯は言わば、神のことばである聖書のみことばの実写化です。実写版聖書、それがキリストなのです。聖霊は、私たちの心のみことばに向かわせます。主がなしてくださった恵みに気づかせ、心向けさせます。そして必要な時に、キリストから受けたこの恵みを語る者、証しする者としてくださいます。キリストを思い起こさせること、それが今日確認した、聖霊の一つ目の働きです。

聖霊の働き② 聖霊はいつも共にいてくださる。

二つ目に確認したいのは、聖霊はいつも私たちと共にいてくださるといことです。

4節の後半でイエス様は、「わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした」そして、その理由を「それはあなたがたとともにいたからです。」と語っています。それまでずっと、イエス様は弟子たちのすぐそばにいて、共に歩んでくださいました。しかし自分がもうすぐ去ろうとしている今、弟子たちに語っておかなければならないことがありました。それが、後に来られる助け主である聖霊についてです。

イエス様が一緒にいてくださることは、どれほど素晴らしいことでしょうか。しかし肉を取られ、私たちと同じ人となってくださったイエス様よりも、もっと身近に私たちと共にいてくださるお方を、神様は用意し備えていてくださいました。それが聖なる御霊です。

聖霊は、私たちの心に宿り、私たちの内側に住んでくださいます。誰よりも近く私たちと共にいてくださるお方です。私たちを内側から強め、励まし、私たちの声にならない呻(うめ)きさえをも神様に届けてくださいます。

罪ある私たちの中に、聖い聖なる御霊が住んでくださることは、本来あり得ないことです。しかし、キリストの十字架がそれを可能にしました。神様がそれをよしとしてくださったのです。イエス・キリストのゆえに、それでよいとしてくださったのです。

私たちの主はインマヌエル（神はわれらとともにいる）の主です。遠く離れたところにいるのではなく、私たちのことをこの上もなく愛していてくださり、私たちとともにいることを喜んでくださるお方です。神様は、その愛ゆえに、こんな小さな私たち一人ひとりにも目を留めてくださり、そして共にいたいと考えてくださるお方なのです。

聖霊の働き③ 聖霊は真理を教えてください

御霊の3つ目の働きは、私たちに真理を教え、すべての真理に導いてくださることです。弟子たちは、悲しみで心がいっぱい、イエス様が語ってくださった素晴らしい約束を信じるのができませんでした。しかし、13節では、聖霊、「すなわち真理の御霊が来ると、すべての真理に導いてくださる」とイエス様は語っておられます。

真理とは何でしょうか？今の世の中は、「真理」が揺らいでいる時代であると思います。客観的で、誰にとっても正しいこと真理があるというのは傲慢なことだと見做されるようになりました。今、世の中を覆っているのは、あなたにとっての真理と、私にとっての真理は違うのだという相対主義や人の思いを優先するヒューマニズムです。

注意深く読んでみると、13節の後半部分で「御霊は、自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語る」と言われていることに気が付きます。御霊はだれから聞き、だれから受けた言葉を語るのでしょうか？それは、父なる神様です。つまり、「真理」とは神の御心のうちにあるのです。「罪」、「義」、「さばき」について語っている8節から11節の内容は、私たちのイメージする「罪」や「義」、「さばき」とは少し違っているのではないのでしょうか。今日は詳しく触れる時間はありませんが、ここには人の考えではなく、神様がそれらについてどうお考えになっているかを示しています。

聖霊が教え、そして私たちを導く真理とは、神さまの御心の真理です。それは、父なる神様がおられ私を愛して下さっていること、主イエスの十字架が私たちのためであったこと、主イエスが死からよみがえられたこと、主イエスこそが救い主であることなどです。

さらに、神様がこれから私たちに与えようとしておられる、将来の数々の約束。信じる者には永遠のいのちが与えられること、神様が新しい天と地をつくられること、これらはどれも普通には信じ難いことばかりです。しかし、それは神さまの御心であり、真理です。

まとめ

今朝の説教題は、「神の信じ難い約束」です。イエス様が弟子たちに語ってくださった「聖霊を送ってくださるといふ」約束のことを考えながら、この説教題を付けました。

準備しながら示されたのは、神様もまたこの約束の実現を望んでいてくださるということでした。この約束は、私たちの希望であるだけでなく、神様の御心でもあるのです。

今朝、聖霊の働きの2つ目のところで、「私たちの主はインマヌエルの主である」ということをお話ししました。では、主なる神様は、ご自身の呼び名の一つとされたインマヌエルということに対して、どのくらい真剣で、どれくらい情熱を持っておられるのでしょうか？

聖書を読む限り、それはほとんど、はじめから終わりまで貫かれている、神様の一貫した御心なのです。主なる神はエデンの園に降りて来られ、アダムとエバのもとに度々訪ねて下さいました。ご自分の民としたイスラエルの間に、昼は雲の柱、夜は火の柱となり、また幕屋の聖所にご臨在下さいました。つい

には、人となって私たちの間に住まわれました（ヨハネ1：14）。これが主イエス・キリストです。そして今や、御霊なる神として私たち一人一人のうちに住んでくださるのです。さらに、やがて来る終りのときには、私たちの上に栄光を輝かしてください、私たちと顔と顔を合わせて会うと約束して下さっています。この世のすべてが改められ、神さまが新しい天と地をお造りになるとき、そこには神様の御心が実現します。その新天新地の様子について、黙示録はこのように語っています。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から、涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」（黙示録21：3-4）

罪のうちに失われた存在である私たちを見つけ出すために、神様はこの罪に満ちた世界に御子キリストを送り、イエス様は私たちのための身代わりとなって、私たちに救いの道を開いてくださいました。このこと自体があり得ない、神の有り難い恵みでした。

しかし神のなさること、神さまの御心は、それで終わりではありませんでした。御子を信じる者に、御霊を与えることでさらに私たちを神様に近づくことができるようにと願ってくださいました。

そして将来、神の国が完成に至るときをただ待つのではなく、今この世に住む私たちに、しかもまだきよめられていない罪を抱えた私たち一人一人の心の闇の中に、主は聖なる御霊を送ってくださいました。信じる者に与えられる御霊は、将来私たちが御国を受け継ぐ保証であると聖書は言います。御霊は、私たちの信仰の歩みを内側から支え、励ましてくださるのです。

弟子たちは、これから神様がなさろうとしていることを聞いて、心が悲しみでいっぱいになってしまいました。私たちにもそのような時があります。神さまの御心が分からなくて、目の前で起きていることの意味が分からなくて、心が悲しみでいっぱいになることがあります。

しかしそのとき、イエス様は「しかし、わたしは真実を言います。」と、神さまのご計画の中にある「真実」を明らかにしてくださいました。「それはあなたがたの益になる」のです。

神は良いお方です。聖霊は、その神様の御心を、私たちを愛してやまないその愛を、私たちに教え、導いてくださいます。

主イエスを信じる者には、誰にでもこの御霊は与えられています。神さまが私たちのうちに御霊与えてくださることを信じましょう。そして、御霊を悲しませるのではなく、御霊に導かれて、私たちの主である神を信じて、今週も歩んで参りましょう。

お祈りしましょう。